

令和2年4月30日

## 令和元年度終了プロジェクト研究の報告書について

国立教育政策研究所では、令和元年度に終了したプロジェクト研究について、その報告書を取りまとめましたのでお知らせします。

### 1. 令和元年度終了プロジェクト研究

「社会的活動に必要な成人スキルと多様な学習機会に関する基礎的研究」  
【研究期間：平成30～令和元年度】

〔報告書〕社会的活動に必要な成人スキルと多様な学習機会に関する基礎的研究  
調査報告書

### 2. 各プロジェクト研究の目的・概要、成果 別添を参照

### 3. ウェブサイトへの掲載

報告書の概要及び報告書本体は、当研究所のウェブサイトに掲載しています。  
([https://www.nier.go.jp/05\\_kenkyu\\_seika/seika\\_digest\\_r01a.html](https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/seika_digest_r01a.html))

(お問合せ先)

国立教育政策研究所 生涯学習政策研究部  
総括研究官 志々田 まなみ  
電話：03-6733-6963 (直通)

# 社会的活動に必要な成人スキルと多様な学習機会に関する基礎的研究

## 研究の目的

おおむね18歳以上を対象とした成人学習の実践において、どのような成人スキルが重要だと捉えられているかを、ヒアリング調査により実証的に明らかにする。

## 社会的活動とは

地域の活性化、地域で生活や活動をする人の安全・安心の推進、社会的・経済的な自立を図るなどの目的のもと、家庭以外の場で、多様な人々と交流し、協力し合っておこなう活動。

## 成人スキル

人が学習や経験によって、後天的に伸ばすことが可能な力。

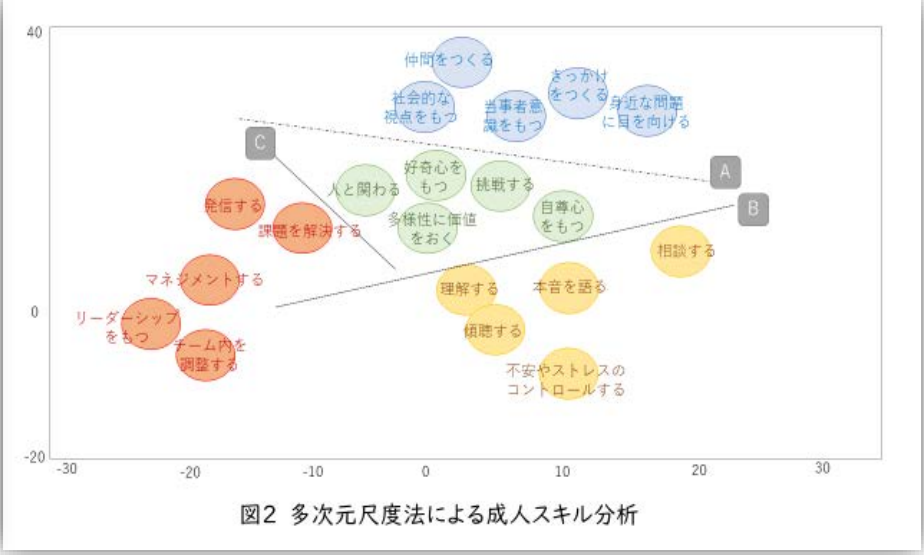
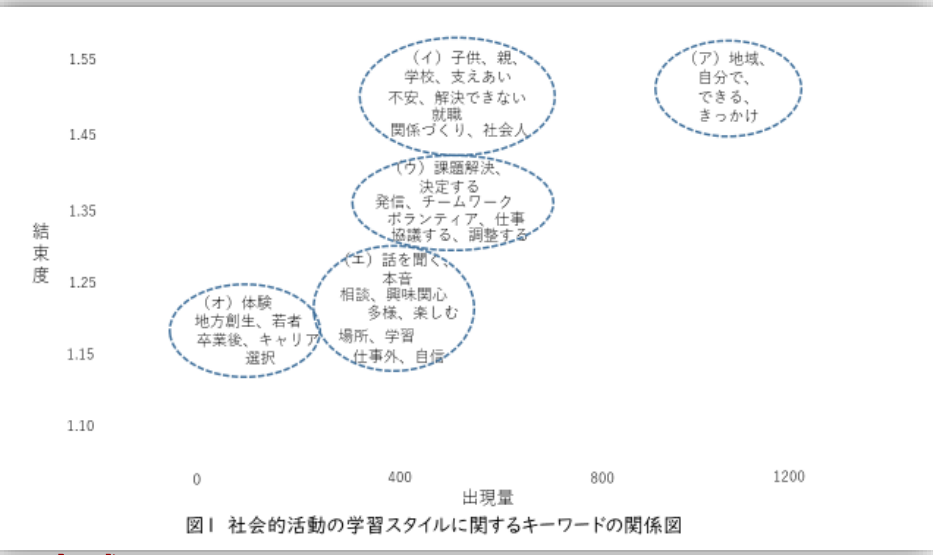
## 調査の概要

### ヒアリング調査

高等学校卒業後の教育機会（一部高等学校の教育活動を含む）で、計画やプログラム立案に関わっている専門家・指導的立場にある者25ケースに、自らの実践活動の目標としていたり、成長や成熟を期待していたりする成人スキルの具体的な内容について、ヒアリング調査を実施。（期間：平成30年8月～令和元年8月）

### 分析手法

聞き取り内容を質的分析（テキストマイニング）にかけ、社会的活動で実施されている活動の学習スタイルと、そこで重視されている成人スキルの特徴について分析。



## 研究成果

社会的活動にみられる五つの学習スタイルについては、図1に示したとおり、「(ア) 地域でできそうなことを見つけるきっかけづくり」にやや傾斜した形で展開し、その他にも4種類の(イ)～(オ)のようなスタイルの学習・活動が展開していることが明らかになった。そうした場で重視されている成人スキルについては 図2のような用語で表現されており、おおよそ色分けされた四つのグループに分類できた。ただし、これらは独立したスキルではなく、実際の学習や活動場面ごとに、必要とされる能力が移り変わったり、求められる強さが変化したりする総合的な能力として、捉えられていることが明らかになった。

「社会的活動に必要な成人スキルと多様な学習機会に関する基礎的研究」調査報告書の概要について

本研究は、成人の社会的活動において、現在どのような学習活動が行われており、それら実践の場でどのようなスキルが重要だと捉えられているかを、ヒアリング調査により実証的に明らかにするものである。今回の分析により、様々な社会的活動において共通してみられる5つの学習スタイルと、そこで重視されている4つのスキル（以下、「成人スキル」という。）の特徴について、明らかにすることができた。

## 1. 調査研究の目的・概要

### （1）調査研究の目的

本研究は、成人期（おおむね18歳以上）においても社会の中で活躍するスキルを育成する生涯学習機会の拡充方策を検討することを目的としている。そのために以下2点について調査、分析を行った。

- ①地域の活性化、暮らしの安全・安心の推進、若者や障害者の社会的な自立支援等、社会的な課題の解決を狙いとした活動（以下、「社会的活動」という。）に着目し、現在どのような学習スタイルにより活動が実施されているのかを明らかにした。
- ②これら社会的活動で意図されている学習目標としてのスキルに焦点をあて、一体どのようなスキルが実践の現場で重視されており、それがどのような名称や用語で表現されているのかについて、探索的な手法を用いてその特徴を分析した。

### （2）調査研究の概要

高等学校卒業後の教育機会（一部高等学校教育を含む）を取り上げ、その計画やプログラム立案に関わっている専門家、指導的立場にある者、25ケース（1ケース原則1名、最大2名まで）に対し、自らの実践活動の目標としていたり、成長や成熟を期待していたりする成人スキルの具体的な内容について、ヒアリング調査を行った。こうした聞き取り内容を質的分析（テキストマイニング）にかけ、学習スタイルと成人スキルの特徴について分析を行った。

なお、被調査者に対しては、成人スキルとは、後天的に教育や訓練によって習得できる能力や技術であることを説明し、その点を十分意識しながらヒアリング調査に回答してもらった。

## 2. 研究成果の概要

### （1）社会的活動として取り組まれる基本的な5つのスタイル

25ケースのヒアリングで用いられた語32,005語の出現度を横軸、言葉どうしのつながりの強さを示す結束度を縦軸に設定し、分析を行った。図1はその結果のうち、出現度の高い語（50回以上）と、それに強い結びつきがみられた語を絞って、表示したものである。分析の結果、社会的活動として取り組まれている活動には、大きく5つの学習スタイルがあることが分析できた。

最も典型的なスタイルが、図1内右上に示されたキーワードで特徴付けられた活動で、（ア）地域で自分にできそうなことを見つけるためのきっかけづくり、を狙いとしたものであった。他と比較すると、出現度は飛び抜けて高く、結束度も高いことから、量的にも質的にも、こうした狙いを強く志向する社会的活動が多くを占めている現状が理解できる。

その次に量的に多く見られたのが、（イ）同じ不安や課題や抱える者（親の子育てや若者の就職問題）どうしのネットワークづくりの活動と、（ウ）課題の解決に向け、効果的、効率的に集団活動をを進める活動であった。（イ）は（ア）と同水準の高い結束度であり、（ウ）よりは活動内で強く意図される学習スタイルであることが分かる。

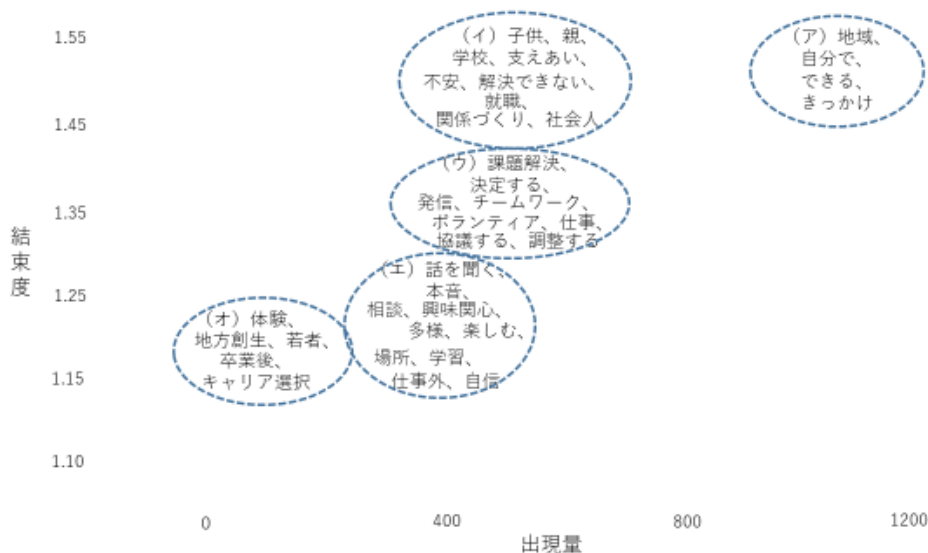


図1 社会的活動の学習スタイルに関するキーワードの関係図

ここまでの3つの学習スタイルより出現度も低い、結束度も低いが、(エ) 多様な他者の話に耳を傾けたり本音を語りあったりする、仕事以外の時間を楽しむ活動や、(オ) 地方創生の文脈で、若者を対象とし、地域を担う次世代の育成を狙いと

した取組も、ある程度まとまった学習スタイルとして志向されている傾向が今回、読み取れた。

## (2) 社会的活動で育むことが期待される成人スキルの4つの特徴

次に、成人スキルの特徴を明らかにするため、スキルとして解釈することが可能な動詞とサ変名詞（動詞「する」に接続してサ変変格活用の動詞となりうる名詞）の語だけに着目し、その特徴を探索的に掘り下げていくため、多次元尺度法（MDS: Multi-Dimensional Scaling）を用いて分析を行った。図2は、分類できた集合群ごと色分けし、なかでも結束度が高く特徴をよく表す語だけを抽出し、二次元で図示したものである。こうした分析法では、近くに配置された語どうしの共通性、あるいは、近接する集合群との相違性や相関性から、集合群ごとの特徴を分析者が解釈する必要がある。こうした手順を踏み、今回は図2内のA~Cの3軸で分かれる4つの集合群に着目し、社会的活動で重視されている成人スキルについてモデル化を試みた。

A軸は、青色集合群と緑色集合群の間にある。青色集合群は、共通の課題を抱えている者どうしが結びつき、活動していこうとするプロセスで求められるスキルであるのに対し、緑色集合群は、多様で未知な領域や他者へと関心を広げ、活動を拡大するプロセスで求められるスキルである。そこから、「活動の結集—活動の拡散」という違いを読み取った。

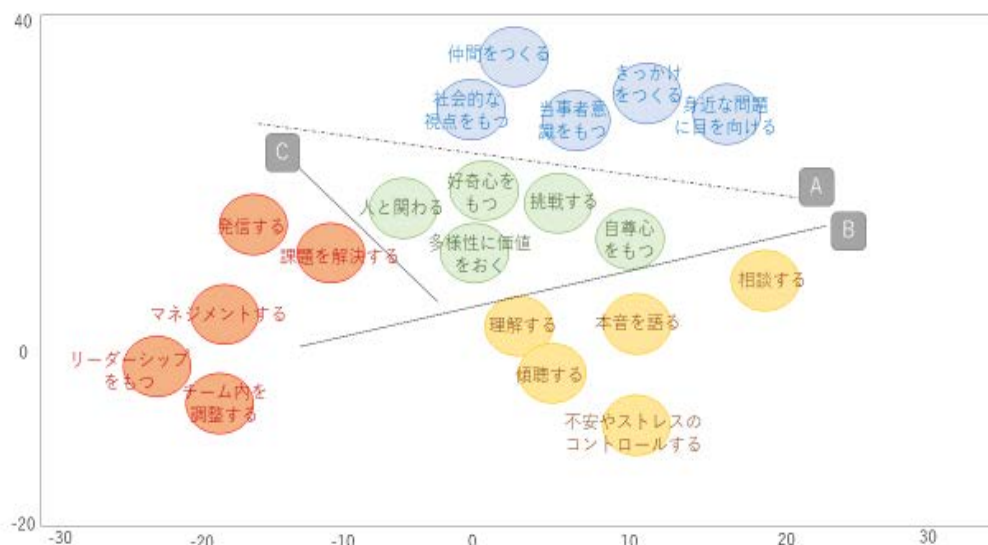


図2 多次元尺度法による成人スキル分析

二つ目、B軸は緑色集合群と黄色集合群の間にあり、「外的働きかけ—内的働きかけ」と名付けた。緑色集合群にみられるような、興味や関心を外界に向け、他者に働きかけたり、実際に行動したりする際のスキルとい特徴と

は対称的に、黄色集合群は、自己理解や他者理解、あるいはセルフコントロールといった精神世界へと働きかける際に必要とされるスキルという特徴が読み取れる。最後のC軸は、緑色集合群と橙色集合群の間にあり、橙色集合群の方が組織的な集団活動で求められるスキルという特徴があることから、「個別活動ー組織活動」という違いを捉える軸として解釈した。学習や活動を展開していく上で、眼前の活動が、どんな局面（結集ー拡散）にあるのか、働きかける対象（外的世界ー内的世界）は何か、どんな体制（個人ー組織）で進めるか、といった学習や活動の場面ごとに、求められている成人スキルの特徴が、変化するという傾向がここから読み取れる。

さらに、今回浮かび上がった成人スキルモデルは、それぞれのスキルが独立しているのではなく、互いに緩やかに結びついたものである可能性が大きい点についても、指摘しておきたい。例えば、緑色集合群と黄色集合群との近接部にあるスキルは、「多様性に価値をおく」と「理解する」、「自尊心を持つ」と「本音を語る」の2点であった。他者の多様さを受容するためには理解しようとする行為が不可欠であり、自尊心を高く保たなければ他者に本音で語ることは困難だ。また、橙色集合群と緑色集合群との近接部「課題を解決する」と「人と関わる」も、当事者と深く関わろうとしない限り、課題解決は不可能である。このように、近接する成人スキルどうしの間には表裏一体的、あるいは相互補完的な関係性が存在している。

以上の結果を総合的に考察すると、今回ふ分けして見えてきた4つの特徴をもつ成人スキルモデルは、いずれか一つのスキルを習得できれば、社会的活動の一部を円滑に遂行できるようになるのではなく、実際の学習や活動場面ごとに、必要とされる能力が移り変わったり、求められる強さが変化したりする総合的な能力モデルとして、理解した方が良さそうである。こうした能力観は、「人は、課題(task)やその要求を成し遂げる(master)のに、どのような認知的コンピテンシーを必要とするのか」という観点からコンピテンシーを解明しようとする、OECD等の国際的な研究アプローチとも通じるものである。

### 3. 成果と課題

以上のような調査結果が、社会的活動を促進する方策を検討する基礎的データとしてどのような意義があるのか、大きく2点指摘しておきたい。1つ目の成果としては、研究目的の部分でも述べたが、日本において認知的な力以外も包括した成人スキルに関する先行調査研究は管見の限りなく、この試みは日本の社会的文脈に沿った成人スキルを解明する基礎的な研究の第一歩として位置づけることができる点である。2つ目の成果としては、現在も多分野で推進され、今後ますます重視される地域での課題解決を目指す学習や活動が、地域でできそうなことを見つけるきっかけづくり、という狙いにやや傾斜した形で活動が展開されていること、更にその他にも4種類の顕著なスタイルをもった学習や活動が展開していることが、明らかになった点である。こうした学習スタイルの類型は、社会的活動に関する定量調査を実施する分析枠組みとして活用できる。また、今後、展開される社会的活動の推進方策によって、学習や活動にどのような経年変化がみられるのかを判断する基準の一つとしも、役立つ可能性がある。

一方、今後の課題としては、今回導き出した5つの学習スタイルと4つの成人スキルの特性との相関性を、本調査の分析枠組みでは解析することができなかった点が、一点目としてあげられる。社会的活動の展開ごとに求められている成人スキルが変化することは明らかになっただけに、今後は、両者の関係性を明らかにできる調査枠組みを再検討していく必要がある。

第二に、ヒアリングによって聞き取った文章をテキストマイニングの手法によって分析を行ったが、総抽出語数が3万語を越える結果となった。こうした膨大なデータの分析は、物理的な困難さが伴い、今回の分析では出現度や結束度が顕著に高い語のみに絞って分析せざるを得なかった。抽出できた学習スタイルや成人スキルの特徴も、調査データの一部の分析結果であって、すべての調査データを反映した結果とはなっていない。今後は、コアになるキーワードを設定するなどヒアリングの方法を工夫したり、テキストマイニングの分析手法についても検討を重ねたりするなどし、改善を試みていきたい。